

に來て携さへた經、もしくは支那で口誦した經は必らずしも梵語のものばかりであつたとは考がへられぬ様に思ふ、もつとも玄奘が屈支、焉耆等の條下で書いて居る様に、當時の佛僧は皆梵語に達して居たものと見ればかゝる疑は一分消滅するけれども、それにしても尙ほ他國の翻譯から重譯したかの疑は充分に存し得る。何故ならば同一の經が必らずしも何れの地方にも同様に印度から傳へられたことは例證頻々として存するからして、かかる時には梵本以外トカラの言葉からもトルコの言葉からも重譯すべき餘地は澤山にある、此重譯の事は佛典について仔細に研究して見るとその事實も明らかに見えて居る、即ち出三藏記集第二（縮藏結帙一十一紙右）に『觀彌勒菩薩生兜率天經一卷、觀世音觀經一卷、禪要祕密治病經二卷、佛母般泥洹經一卷、右四部凡五卷宋孝武帝時、僞河西王從弟沮渠安陽侯、京都譯出前二觀先在高昌郡久已譯出於彼、賣來京都』と記して居る、（宋板には京字の上に於字ありと考異を擧げてある）之によりて見れば彌勒、觀世音の二觀經は高昌郡即ち獨逸探檢隊が前出の經を得たツルファンの地にて已に久しき以前譯せられて居たものを、沮渠安陽が宋の孝武の時に（四五四—四七二）重譯したものと見なければならぬ、明らかに重譯の消息を洩らして居るのは此外には一寸見うけない様に思ふけれども、既に此の如き事實がありとすれば此等の地方から得て來たと書かれて居る經は、或は等しく其地の譯本であつたかも知れない、同じ所に妙法蓮華經提婆達多品第十二一卷を擧げて『自流沙以西、妙法蓮華經並有提婆達多品、而中夏所傳闕此一品、先師（獻正）至高昌郡、於彼獲本、仍寫還京都、今別爲一卷』といふが如きは即ちそれである、かゝる風に記されて居る經は決して少くないのは經錄を通覽して見れば明らかである、そうしてこれらの原本はまた直接梵本ではなくて或は Müller 氏の發表した者に於て認むるが如くトカラのものであつたかも知れないし、尙